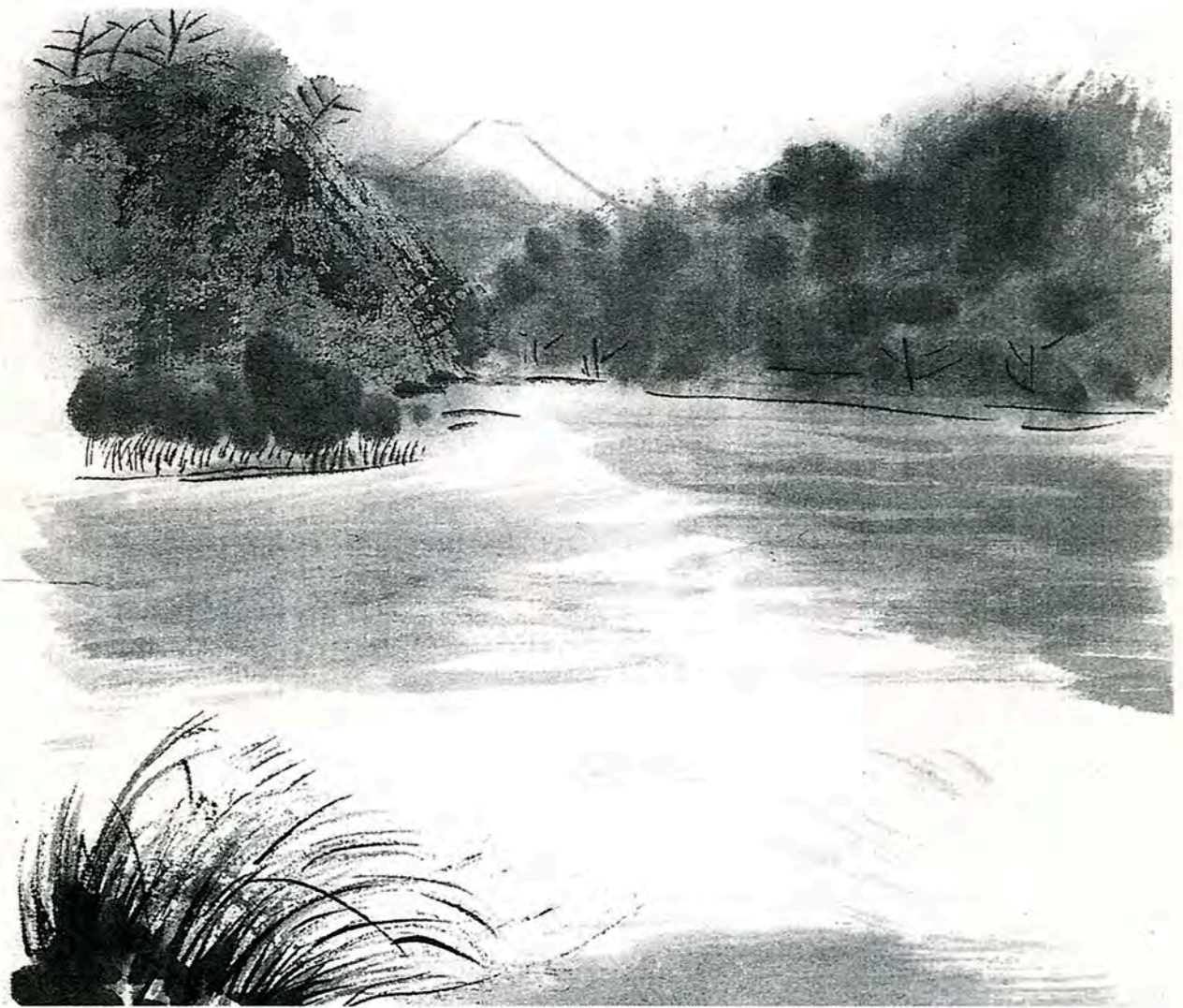


# うめがおか 2

1997 No. 129



東京都世田谷区歯科医師会会報



## 東南アジア旅行の知的楽しみ方 「インド化」された国々へ 遺跡の旅 - I

下馬部会 斎藤賢一

近年、東南アジアへの関心が高まってきました。社会、経済、文化、思想等の面で、又旅行においても人気が高くなっています。もし観光旅行で遺跡の見学があり、何の知識もなければ、ガイドの説明は呪文のように聞こえ、見るものは石の固まり、気温は40度近い中で、汗は滴り落ち、頭はもうろうとして、考えられることといえば、すぐにホテルに帰って冷たいビールを飲むことだけという状態になることは必至です。本来、遺跡はその国の歴史、文化の証人であり、石の固まりに見えていた建物には秘密の約束事があり、その秘密を解きあかすカギ（知識）を持っていれば、ガイドの呪文も消え、さわやかな風があなたを包み、タイムマシンのごとくにしえの古代に連れていってくれるでしょう。そのカギを手に入れるのは簡単ではありませんが、とても楽しいことです。すなわち知識を持って旅にでるのです。遺跡についての知識は大切ですが、それを得ようとすればおのずと歴史、文化、現在の状況まで調べることになるでしょう。これには時間がかかります。しかしあなたが知識を得ようとした瞬間からすでに旅行は始まっているのです。もし1週間の旅

行ならば、1~2カ月前から知識の収集にあたると良いでしょう。そうすればあなたの肉体は机に座っていますが、精神はすでに旅行にいつてしまっているのです。1週間の旅行代金で1~2カ月も旅行に行けるのです。さらにあなたはその国の知識を色々持っているため、その土地の人との出会いにおいて今までとは違う何かを必ず得ることでしょう。そうです、カギの数が多いほど旅行は楽しくなるはずで

今回そのカギの一つである、東南アジアのヒンドゥー寺院建築についてお話ししたいと思います。



ボロブドゥール 中部ジャワ



アンコールワット カンボジア



バガン ミャンマー

[東南アジアとは]

日本は同じアジアにありながら、今まで常に西側を見てきました。しかし同じアジア人としても一度東南アジア文化に目を向けてみると、そこにはとても興味のある共通事項があります。昔からの生活文化（基層文化）についてみてみますと、第1点として稲作と精霊崇拜（アニミズム）、祖先崇拜、水田耕作に由来する定着した共同社会、その中での諸行事などがあります。私たちが東南アジアの田舎に旅をしたときに感じる郷愁の念やヨーロッパやアメリカでは見ることの出来ない原風景はこのような基層文化に由来しているのです。第2点としてインドシナと言う名のごとく、インド、中国のはざまにある国ですので、両外来文化の影響を受けています。特に副題にある「インド化」、すなわちヒンドゥー教および仏教を基本とした、人間の生き方に直結した理念をインドから受けたということです。これらの国々にはインドシナ半島のタイ、カンボジア、ラオス、ベトナム、そしてミャンマー、インドネシア（地理的にはさらにマレーシア、シンガポール、ブルネイ、フィリピンを含む）があります。

「歴史」

そもそも東南アジアの国々は、紀元前数世紀よりモンスーン（季節風）を利用して、インド方面との海上交通がありまして、この時代に、後の文化的に程度の高いインドの要素が到来しても消化、吸収しうるだけの社会的に熟した下

地が出来上がっていたようです。そして紀元1～2世紀には、数百人が乗れる巨大な木造船が造られ、インドから金、宝石、香木、香料、象牙、ベッコウなどを求めてインド商人が多数やってくるようになります。インド商人はさらに西側のローマ、ペルシャとの貿易を行っており、カンボジアの港町からは2世紀のローマ金貨が発見されております。彼らは半年ごとのモンスーンを待ってその土地に止まり、その内の何人かは土地の有力者の娘と結婚して、インド文化を村々に伝えていきました。このインド文化として農業に関係するものは、稲作と灌漑、牛車、砂糖椰子など、また武器、王権思想、建築、宗教としてヒンドゥー教、大乘仏教、文芸として「ラーマーヤナ」「マハーバーラタ」世界創造神話、その他神話、美術様式、インド文字等であります。王権思想（デーヴァラージャ）とは神と王とを一つに結びつける考え方で、日本でいう現人神（アラヒトガミ）にあたります。王のいるところは宇宙の中心であり、その支配する国は宇宙全体であるという思想で、特にカンボジアのアンコール王朝で寺院、都市作りによく表されています。各種神話および叙事詩「ラーマーヤナ」「マハーバーラタ」は王権思想や宗教と違い、一般民衆の中に広がり、現在でもインド本国はもとよりカンボジア、タイ、ラオス、インドネシアなどにおいて、影絵や演劇、本として生き続けています。これらの神話、叙事詩は寺院建築において重要なカギとなります。一



1～3世紀の東南アジア

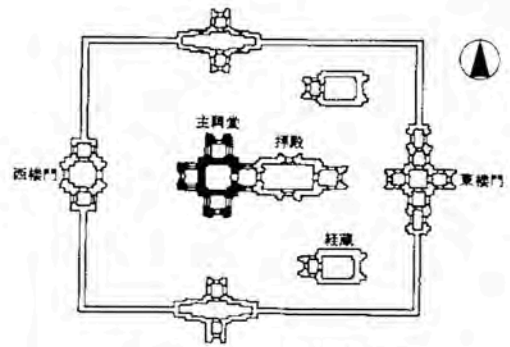


7～8世紀の東南アジア

方有力者達もインド文化を積極的に取り入れ、特にヒンドゥー教は体系化された宗教と言うよりは、生活の規範となり、インド社会の持つカースト制度としっかり結びついているので、有力者の神性的権威付けを行うのに都合が良く、その最高権威者であるバラモンと結びついて力を増していきました。さらに有力者は逆にインドに使節を送ってインド文化を吸収していたようです。ここで重要なことはインド化は武力によってではなく平和裡に行われ、又仏教の僧侶やキリスト教の宣教師等の布教活動をヒンドゥー教は行わなかったということです。このころからインド化の影響を受けた諸民族はすでに多数の異なった集団に分かれていきました。中部ベトナムにはチャンパ王国、メコン川流域には扶南、ミャンマーにはモン族が王国を作っていました。7～8世紀になりますと、強大な国家が出現してきます。スマトラ南部には海洋国家シュリーヴィジャヤ、中部ジャワにはシャイレンドラ朝、メコン中流域には扶南を滅ぼしたアンコール朝、ミャンマーでは雲南省から南下してきた南招国のちのパガン朝などです。そしてこれらの強大な国家がその経済力と人力によって大遺跡群を作ったのです。その建築は13世紀まで続き、初期には強かったインドの影響は時代を経るにしたがいインドを基本としながらもその国独特の寺院建築を築きあげました。そしてついにはインド本国でも類を見ないアンコールワットやボロブドゥールが出現するのです。しかしこれらの大国もたびかさなる戦争や、イスラム教、上座部仏教（小乗仏教）の流入によって13世紀以降は衰退していきます。それにもなって巨大なヒンドゥー、仏教寺院はほとんど建立されなくなります。

「ヒンドゥー教寺院の構造」

まず初めに寺院がどんな場所に建てられているかを観察します。なぜならそこは神聖な場所であることが多いからです。日本でも神社は山や丘、森などをバックにして建てられています。山や森は神が宿る所であり東南アジアの寺院もこのような場所に建てられていることがあります。又周囲になにもない荒涼とした場所や、畑



クメール建築の基本プラン

の中、森の中等にぽつんと建てられている場合、立てられた当時その周囲はとて大きな町だったことも考えられます。それではカンボジアの寺院を例にとって寺院全体を見てみましょう。



リングの参道 バナム・ルン 東北タイ

各寺院の構成は時代とともに複雑になりますが、基本的には、参道一周壁—楼門—祠堂と一直線に並んでいて、おおむね左右対称か四方対象であります。使われている建築材料はレンガ、ラテライト（紅土）、砂岩で初期にはレンガが、後に砂岩が使用されるようになり、ラテライトは主に基礎や外壁、参道等に用いられています。インドネシアにおいては火山が多いため安山岩が用いられています。参道を持つものは大きな寺院に限られ左右にシヴァ・リング（シヴァ神の創造的なエネルギーを石の男根で表している）が日本の石灯籠のように並んでいるものや、インド神話の乳海攪拌の彫像のあるものなどがあります。参道を歩いていくと正面に楼門（塔門）が見えてきます。楼門は周壁につながって寺院の外壁を作り、大きな寺院で



楼門 ムアン・タム 東北タイ

は二重、三重の周壁に囲まれていることもあります。楼門で注意すべき場所は入り口の周囲やまぐさ（入り口上部の梁）で素晴らしい彫刻があります。南インドではこの楼門が発達して数十メートルになるものもあり、高い建物のないインドではランドマークになります。楼門をく



まぐさの彫刻 パノム・ルン 東北タイ



祠堂内部のリング  
ブラサット・クラヴァン  
カンボジア



破風の彫刻「ラーマーヤナ」

バンティアアイ・スレイ カンボジア

ぐりますと一番重要な祈りの場所である祠堂があります。一つとは限らず3堂のものや、5堂、6堂の寺院もあります。祠堂とは仏像、神像、リング等の礼拝供養の対象物を祀ってある堂で、その前に信者が集う場所として前殿が付いている場合もありますが初期の寺院や規模が小さい寺院では祠堂のみです。つまり祠堂になにが祀られているかによって、その寺院の宗教や宗派がわかります。ただし東南アジアの場合は盗掘や破壊が多く、また後代に変えられた場合もありますので注意が必要です。祠堂や前殿の内部は非常に狭くなっています。これは建築上の問題で、ミャンマーをのぞく東南アジアの建築技術では広い空間を作ることが出来なかったのです。あのアンコールワットやバイヨン寺院でさえ回廊を使って広く見せていますが、広い内部空間を備えている寺院はありません。祠堂で注意すべきところは基壇、ドアフレーム、まぐさ、破風などで、魅力的な彫刻があります。インドでは前殿の天井や柱に彫刻がありますが、東南アジアの場合ほとんどなにもありません。アンコール遺跡では特にまぐさ、破風にインド神話や叙事詩の優れた彫刻が、祠堂入り口周囲にアプサラ（天女）、デヴァター（女神）、ドゥバラバーラ（門神）が彫刻されているのが特徴です。インドでは構造上、破風はほとんどなく、基壇から屋蓋までびっしり彫刻されています。その他、境内には寺院によって経蔵、僧房（仏教寺院に有り、僧が生活するところ）、沐浴場、が付随しており、彫像が安置されてい

る場合もあります。

境内をひととおり見学したら、木陰で休みましょう。遺跡を渡る風があなたを包み、いにしえの時代につれていってくれるでしょう。

帰途の飛行機の中で、楽しい思い出とともにその国に対する関心が深まってきます。そして次はどこへ行こうかと考えはじめ、すでに次の旅行がはじまっていることに、あなたは驚くにちがいありません。

今回は、一番重要なカギである彫刻と、そのもとになっているインド神話や叙事詩についてお話ししたいと思います。



祠道入口の彫刻「デヴァター（女神）」  
バンテアイ・スレイ カンボジア